

パリ通信・第164号

「セザンヌ展〜ブッフアン邸」

毎年夏が来ると南仏プロヴァンスでは音楽、演劇、ダンス、講演会など文化フェスティバルが開催される。79年目を迎えた「アヴィニョン 演劇祭」、「ラ・ロック・ダンテロン 国際ピアノフェスティバル」は45周年、野外、教会、修道院など夏ならではの会場を利用したプログラムで多くの人が集まる。中でも2025年エクサンプロヴァンスの夏はポール・セザンヌ(1839-1906)に捧げられている。



セザンヌの生まれ故郷であるエクサンプロヴァンス、とりわけ「サント・ヴィクトワール山」風景は有名だが、今回の回顧展はセザンヌの父が1859年に購入した「ブッフアン邸」での当時の生活を具体的に知る

ことができるのがとても興味深い。フランス語で「Le Jas de Bouffan」。「Jas」(ジャス)とはプロヴァンス語で「田舎の別荘」のことで、都会の裕福な階級層がプロヴァンスの夏の暑さと疫病から逃れるために所有していた館である。



セザンヌの父ルイ＝オーギュスト・セザンヌ(1798-1886)はエクサンプロヴァンスの中心地クール・ミラボー通りで小さな帽子屋を経営していたが投資の才覚がある人で、銀行投資や鉄道株式で財を成し、1859年15ヘク

タールの「ブッフアン邸」領地を購入する。現在の館は1730年頃から建てられ、領地内には豊かな水脈があり、人を使って野菜や葡萄栽培を行っていた広々とした領地である。館はセザンヌの死後売りに出され大きく改装されたが、最終的





にエクサンプロヴァンス市が所有者となり、セザンヌが生活していた当時の館に戻す修復が進行中である。

エクサンプロヴァンスに生まれたポール・セザンヌは、1857年から1862年までマルタ邸の一部で開かれていた無料のデッサン学校(1949年から現在のグラネ美術館に成る)に在籍してい



た。1859年父親が購入した「ブッフアン邸」に一家が住み始めるのは1870年からで、購入直後からセザンヌはサロンの壁に絵を描き、内装に携わっていた。1860年頃の初期作品が「四季」と題された油彩の壁画である。向かって左から「春」「夏」「冬」「秋」の順番で配置されたそれぞれ高さ315cm x 幅100cm の女性たちで、「近代絵画の父」と呼ばれる後期セザンヌからは想像し難い作風だ。「ブッフアン邸」が売りに出され所有者が変わると、作品は上に壁紙が貼られたり、売却されたりした。セザンヌの初期作品に興味を持つフランス人は居らず、日本、ドイツへと売られていった。

「四季」と同じくサロン壁画としてセザンヌが模写した「かくれんぼ遊び」(1860-1862頃)(168 cm x 222 cm)(ニコラ・ランクレによる)は、尾道市「なかつ美術館」に所蔵されている。漆喰の壁に直接描いた油彩を壁ごと剥ぎ取り、絵の具層だけをキャンバスに残して売却されたのである。

4人の女性「四季」の中央に描かれたのがセザンヌ最初の肖像画「父ルイ=オーギュスト・セザンヌ」だ。ポール・セザンヌにとって父親は無くてはならない大切な存在だった。

「ブッフアン邸」内を改装してアトリエを持つ資金を提供してくれた。創作だけに没頭できる支援を生涯受けたのである。太陽光が一日中安定する北に面した部屋で、壁を壊して大きな窓を設け、内部を灰色に塗った。このアトリエで多くの静物画が描かれた。1861年初めてパリに行きルーブル美術館を訪れ、パリのサロン、文壇、美術界を知る。エクサンプロヴァンスの父の銀行を手伝いながらパリとの往復を続ける。当初はパリのサロンに出展しても入賞はおろか落選展にも入らず、セザンヌの評価は低く、父親からの月々の支援がなければ生活は出来なかった。1869年パリでデッサンのモデルをしていたオルタンス・フィケと知り合い、1872年には息子ポールが生まれるが父親の仕送りが途切れることが心配で事実を隠していた。パリにオルタンスと息子を残して、エクサンプロヴァンスで創作活動をする生活が続ける。オルタンスと正式に結婚するのは父親が亡くなる1886年のことだが、父親の死後も家族と生活を共にすることはなかった。セザンヌにとって創作の核はエクサンプロヴァンスという場所であり、そこに生きる人々の生活であり、サント・ヴィクトワール山の風景だった。1880年以降は印象派のグループからも離れて独自の様式を探究し、キュビズムを始めとする抽象画への道を開いた。

グラネ美術館の展覧会は10月12日まで開催されている。これからフランスに行かれる方は「ブッフアン邸」と合わせて見学されることをお勧めしたい。（古賀順子記・撮影）